

山田洋次セレクション『日本の映画』

写真は復刻版 岩波写真文庫「山田洋次セレクション」の一冊だ。山田洋次監督による「昔、撮影所ありき」という巻頭文を抜粋して紹介する。

撮影所の時代、というのがその昔あった。

テレビ以前、映画が娯楽の王座を占めていた頃、松竹、東宝、新東宝、大映、東映、そして日活の6社がそれぞれ自前の撮影所を持ち、そこで製作した映画を自前の配給機構を通して直営の映画館ならびに全国にまたがる系列館で上映する — つまり6社が独占的に製作から上映までを一貫して行うという、世界でも珍しいシステムのあった時代。黒澤明、溝口健二、小津安二郎たちの手になる数々の世界的名作はほとんどこの時代に作られた。つまり日本映画の黄金時代をこの写真集は見せてくれる。

ぼくが大学を出て松竹大船撮影所に助監督として入社したのは木下恵介監督が「日本の悲劇」を作った2、3年後である。だからこの写真集に写っている木下組のスタッフは懐かしい人ばかりだ。

各撮影所にはそれぞれ千人を超えるスタッフと専属俳優がいた。プロデューサー、監督、脚本家から大道具小道具の職人たち、ロケバスやトラックの運転手。大部屋の俳優はもっぱら通行人専門だったが、これらのスタッフ俳優全員が月給をとる正社員であり従って労働組合員でもあった。昼休みのひととき、噴水のある芝生で一服していると録音助手の青年が映画論をふっかけたり、編集助手がおれの書いた脚本を読んでもくれないかと云ったりしたものだ。撮影所はまさしく夢を作る工場だった。「あの環境ならおもしろい映画が出来てあたり前だよ」と黒澤監督が眼を細めて語っていたのを思い出す。「撮影所は建物じゃないんだ。スタッフだよ、腕前ありの活動屋たちがウロウロしている、それが撮影所なんだ」とも云っていた。

今日、その意味での撮影所はない。木下恵介や小津安二郎が活躍し、ぼくが学んだ大船撮影所は10年前に消滅した。東映や東宝の撮影所は建物はあるが、専属の技術スタッフはほとんどいないのが現状だ。という訳で、この写真集を見るとぼくのような昔を知る映画人は感傷的になる。そして、ああ、おれも年をとったなと思う。

久しぶりに本書を手にとったのは、先日「山田洋次の青春～映画の夢 夢の工場～」というNHKドキュメンタリーを視聴したからだ。若き日から今日までの山田監督の歩みを再確認した。幼い頃から映画が好きだった。今では考えにくいだが、小学生の頃から独りで名古屋今池の映画館に行き、東映時代劇などを観た。そのあと、日活の吉永小百合さん、松竹の寅さんなどへと続く。大げさだが、私にとって映画は「人生」そのものだ。

(2021年7月30日)

